社会学理論（山本泰先生）
2015/11/06「社会という場の性質を考える（争い）」2
作成：相関社会科学コース 3 年 オスティン（ツェン シュージェー オスティン）

The Times of Harvey Milk - 背景の説明

Passing（「一般人」のごとく振る舞う＝やりすごす）。これは Goffman の概念
vs. Come Out（自分のアイデンティティを告白する）
↑ゲイのような「可視的ではない」マイノリティが直面するジレンマ

ゲイ・プライド・パレードは 6 月→1969 年のニューヨーク市のストーンウォール事件が起源

ゲイの運動も 1960 年代の市民権運動の一環（発展系）としてみなすことはできるが、フェミニズムなどとは様相が異なる点もある。

人種差別撤廃運動：アフリカ系は第二次世界大戦で差別をしない軍隊で貢献を認められた。市民権運動の高揚期は戦後の冷戦時代。運動弾圧の映像が世界的にメディアで取り上げられるのは国際政治上まずいというホワイトハウスの事情も幸いした。

ゲイ：そもそも発覚したら不名誉除隊。1990 年代の Don't Ask, Don't Tell ポリシー制定後も公言したら不名誉処分に遭う状況が続く。状況の改善が検討され始めたのは 2010 年代。

ディスカッション

力に関して：同性愛者の代表となったミルクが力を行使することで、同性愛者の権利を社会的なイシューにした。ただ、この力は依然として同性愛者嫌悪の力とは非対称的だった。

社会的想像力に関して：反対派は、「自分は社会」「社会は自分」という形で、Private と Public を連結させた。「社会的想像力」としては貧しい。
一方、ミルクの側は、自分のセクシャリティという、元々プライベートなトピックを、社会の「問題」・改革のイシューに据えたことで、社会学的想像力に力を与えた。

Proposition 6 に関しては、ミルクなどが、ゲイではない人々に自分も将来差別されるかもしれないという不安を惹起することで、少数者が直面するイシューに広範な連帯感を喚起することに成功した。ここに社会学的想像力の発動が見られる。
→この「共感・連帯感」が重要。

★そもそも差別とは何か？
上位者が下位者を共感圏（人間の世界）から一括しての排除すること→上位者は差別していることすら意識しない（リアリティー切断）＝差別の本質
＊Island Poverty（孤立して不可視化された貧困）という新しい貧困が「豊かな社会」で生じた←
Galbraith, The Affluent Society, 1958：「見たくないものを見ないですませる能力」

Come Out は 、上位者に、無意識に行っているリアリティー切断の行使を気付かせる。リアリティー切断を揺さぶる。

非可視的なマイノリティのもう一つの例：在日朝鮮・韓国人

川崎市の在日コリアンの Come Out 運動（1990 年代）：子どもを学校に通名ではなく本名で通わせよう！

批判；「子どもを差別の標的にする。子どもにさせるべきではない」

疑問：瀬地山先生はお子さんを二つの名字を持ったまま通わせている、先生曰く、「そうすることで、差別しようとする人は遠のく」→Come Out した方が、ばれて差別されることより安全…

これはゲイについてもあてはまるか？

★親しい友人から Come Out されたときにどう反応したらよいか？を考える。

レスポンスを悪さの順に並べると…

1)「もう友達じゃないね」→差別そのもの

2)「関係ないよ」→友人関係はそんなことでは変わらないという意図であろうが、何かを伝えようとした相手の意図を一蹴することに等しい。

3)「言ってくれてありがとう」→他人事の扱い。マジョリティ目線だからこそ言える。

↑これらのどれもよくない。（悪い順は 1＞2＞3）

4)「それってどういうことなのか聞かせて！」→自分のリアリティー切断を揺るがすこと、共感圏を広げる意欲を表明することになる。これしかないのでは？

<u>次回の予告</u>　★権力という「こと」を見据える。

Conflict Theory（葛藤理論）－ 大気層に低気圧と高気圧があるように、社会に必ず弱者と強者が存在する→力の Zero-Sum Game

Functionalism（機能主義）－ 地球は全体的に調和している。人間において、環境の変化に対応するために、改革派と保守派の総合作用によって進歩が起こる→力の Plus-Sum Game